

空間論的転回と世界文学

大橋 洋一

永劫回帰マシン

もし、と最初に妄想を語らせていただければ、宇宙は有限個の物質から出来ていて、膨張と伸縮を繰り返し、その都度、有限個の物質の組み合わせによって出来あがるのなら、今ある私たちの世界と寸分違わぬ世界が未来（たぶん気の遠くなる未来）に理論上出現するはずである。もしそうなら今ある私たちの世界と寸分違わぬ世界は過去にも出現していたはずである。そもそも、この世界と寸分違わぬ世界は無限に繰り返されるはずである。もちろんその確率は、人間的尺度とは微塵も関係のない天文学的いや超天文学的数字でしか表現できないものだとしても。

この妄想の要点は、今ある世界とまったく同じではなくとも、同じような世界が、あるいは今ある世界の分身ともいえる世界が、どこかに存在するとしたら、それはどこかと考えた場合、中学生、いや小学生でもわかる、つまり私にもわかりそうな、ビッグバン以降の膨張と収縮を繰り返す宇宙観から妄想してみたことにある。これは純然たる妄想あるいは想像力ゲームであって、今の私たちとは何ら関係がない。ただ問題は、同一世界の正確な反復があるかどうかを妄想したり、何か不可能に思える世界（たとえばユートピアでもいい）を妄想したりするとき、私たちはついつい時間的未来や過去に思いをはせることである。いつの日か、あるいはかつてどこかに、と——これが答えもしくは答えのありかとなる。時間思考が私たちの常態となっている。

時間がない

エドワード・W・サイドは、晩年、白血病に冒されたこともあって、時間がない人であった。だが、その時間のなさは、皮肉にもというべきか痛ましいことというべきか、サイドの思想の根幹そのものに由来するところの、時間との敵対関係あるいは時間性の廃棄と、奇しくも連動していた。そのサイドに「敗北について」というエッセイがあって、そのなかで、たといいまは敗北するしかなく、解決の見通しもない状況のなかで、どうするかをサイドはアドルノ経由でこう語る。たとえ負けたとしても、思考すること、ほんとうに考え続けること、「諦めという愚か者の知恵を断固拒否して」批判的思考と抵抗をつらぬくことが重要であると。なぜなら「それが立派に考えぬかれたものである

ならば」必ず「どこか他の場所で、他の人びとによって思考されるにちがいない」のだから、と。ただ、私は最初サイドのこのコメントを誤解していたのである。

「一敗地に^{まみ}塗れたからといって、それがどうだというのだ」（ミルトン『失樂園』第一巻、平井正穂訳）と天国から地獄に追放された墮天使ルシファーことサタンはこう叫ぶ。敗北があってもセカンド・チャンスがある。決してあきらめるな。いずれ勝利する日が来るだろう。希望は「いつの日か」に託される。〈Einmal ist keinmal 一度は数のうちに入らない〉とミラン・クンデラもどこかで述べていた。だが、サイドの引用は、そういうことを述べているのではない。サイドには時間がない。未来に希望を託すという、私たちの安易な思考に冷水を浴びせかけるようにサイドは時間的要因を消去する。そしてもし厳密に構築された批判的思考であるのなら、この地球上のどこかに同じ批判的思考をする者がいておかしくないのであり、あるいは同じ批判的思考が出現しておかしくないのであって、その者と、あるいはその思考と連帯せよと述べているのだ。〈いま〉と〈ここ〉にこそ、答えはあるはずで、いつの日かは、諦めにすぎない。

サイドは、空間的思考を起動させる。それは私たちを呪縛する時間的思考を拒否する姿勢でもある。先に、宇宙の膨張と縮小から考えれば同じ世界は無限に生成されるという、無償の、あるいは無意味な妄想を述べたが、単純な理論的可能性としても、ここで見落とされているのは空間である。宇宙が、たとえ有限個の物質から出来ているとしても、無限に近い広がりなり大きさをもっているのなら、この今の私たちのいる世界と同じような、いや全く同じ世界が、この宇宙のどこかに生じていてもおかしくない。宇宙は広く無限の多様性に関われているのなら、太陽と同じような恒星、地球と同じような惑星、地球上の生命圏と同じような生命圏をもつ惑星が、宇宙のどこかに、あっておかしくない。たとえ実際にそれを見つけるのは不可能だとしても。

いや、そこまで荒唐無稽でなくとも、ただ世界が多種多様ならば、まったく同じでなくとも、個々の組み合わせや配置のなかに、類似するものが出現しておかしくない。もし、ここに確かな思考を実現できていれば、同じ空間のなかのどこかにも類似の思考があってもおかしくないというのは、サイドとともに批評用語のなかに導入された西洋の音楽用語である「対位法」を参照すれば、まさに対位法的世界観なり展望ということができる。あるいは、これもサイドの発案ではないとしても、サイド的展望として語られることが多い、フィリエーションとアフリエーションを想起してもいい。フィリエーションは、親子関係に代表されるような時間軸・垂直軸にそって継承される関係性であるのに対して、アフリエーションは、そうした親子親族関係とは異なる水平的な関係、継承ではなく連帯、時間的連続ではなく空間的共存、伝統ではなく同時多発を意味するものであって、19世紀から20世紀にかけて人間関係や集団の新形態が模索されるときに重視されるようになる。対位法であれ、アフリエーションであれ、横のつながり、空間思考

の発現であって、時間性は排除されているのである。

救済の惑星

時間を排除するとしても、たとえいくら時間が止まったように思われる停滞世界があったとしても、ほんとうに時間がなくなれば、その世界は存在しなくなるので、時空連続体を考えるとき、時間と空間は切り離せない。そのため正確に言えば、言語学でいう通時態と共時態の枠組を援用すれば、ここまで空間と述べてきたものは、共時構造についての比喩的表現であるとして理解できる。しかし、この共時性への関心は構造主義の終焉とともに消滅したかにみえる。ソシュールの言語論的転回は、それまでの言語学が通時言語学でしかなかったところに、言語構造という共時性を導入することにあつたため、歴史から構造への転換として重視された。ところが深層構造重視は、多様な表層構造や言語遂行の無視として批判され、構造主義は構造の不確かさや決定不可能性の理論的難問につきつけられる。構造が抑圧的なシステムに変貌を遂げるのと軌を一にして、今度は構造から歴史への転換がはかられ、現在における新歴史主義の時代へといたる（新歴史主義というスローガンはなくなったが、その理念や概念の影響下に私たちはいる）。こうした趨勢のなか空間思考を論ずるのは、いかにも時代遅れか、あるいは構造主義の洗礼とは別ルートでの、きわめてローカルな話題設定しかすぎないと思われてもしかたがない。

だが、周辺化され無視されたかにみえる空間思考は、ある意味、20世紀から21世紀にかけての可能性の中心として厳然と存在しつづけ、それはまだ終わっていない。このことは、たとえばベンヤミンの「歴史の概念について」（「歴史哲学テーゼ」）からもみえてくる。歴史は、これまでずっと勝者の歴史であって、敗者は周辺化され沈黙を余儀なくされてきた。だが、たとえ敗北と苦難の記録のなかでしか登場しないとしても敗者の存在は勝者の歴史の進展のなかで垣間見ることができた。時には征服者を、あと一歩で倒さんばかりの革命的契機をも出現させたこともあった、その後、残酷な弾圧が待ち受けていたとしても。歴史の天使は、未来にむけて顔を向けるのではなく、過去の破壊と残骸に目を凝らしながら未来に背をむけて未来へと押し出される。だが、その時、天使の視力は、勝者の進歩の歴史的行進のなかに、敗者の歴史を見出し、勝者の行進から人間を解放する隠れた歴史敗者の存在と物語を浮上させるだろう。

チェーホフの『三人姉妹』の末尾にある有名な台詞では、〈やがて時がくれば、自分たちがなぜこのようになったのか、なんのために苦しんできたのか、すべてが判明するだろう。自分たちが経験したこの苦しみも、喜びに変わる未来がいつの日か来るだろう。そのときには自分たちが生きてきた意味も、苦しんできた意味もきっと分かるだろう〉と主人公のひとりが語る（引用は逐語訳ではない——『三人姉妹』を喜劇ととらえる沼野充義教授の翻訳とそれにもとづく上演を私は心から希望している）。ベンヤミンの歴史のヴィジョ

ン——救済の歴史——は、すべてを意味付ける未来における解放の時を希求するものであったと、そう理解されることがある。未来における解放が実現したなら解放へといたる歴史的過程のなかで個々の出来事がもつ意味もみえてくる。たとえ無意味な屈辱的な敗北の出来事であろうとも、解放の未来という視座を得れば、その出来事の真の意味が見えてくる。〈隠れた意味が、無意味の意味がわかるときがくればいいのに〉という、希望とも諦念ともとれる旨の台詞で『三人姉妹』は閉じられる。もしベンヤミン的歴史ヴィジョンが、その通りのものなら、希望が託されるのは、今の無意味の真の意味が出現する、あるいは意味付けられる未来時である。いっぽう時間のなかったサイドが希望を託したのは未来ではなく、今ここにある空間、地球のどこかであった。サイド的「メシア的」思考は「救済の恒星」ではなく「救済の惑星」を視野にいていた。

だがベンヤミンもまた時間思考の人というよりも空間思考の人ではなかったか。ベンヤミンは星座的配置の人ではなかったか。天に星座、地にはパサージュ（アーケイド）——それこそがベンヤミン的世界であって、ここには空間的思考が色濃くうかがえる。そもそもベンヤミンの「歴史の概念について」は、勝者の行進としての歴史を切り裂くような、あるいはその機能を停止・中断させるような、ベンヤミン的比喻を使えば、非常事態を宣言し、急ブレーキをかけるような（この点に関しては、Löwy（2016）を参照）、ある種の革命的試み——「暴力論」でベンヤミンが語ってみせたソレル流のゼネスト——に、つまり時間流を攪乱廃棄したあとに立ち上がる共時的構造を、また星座的配置を実現することに、力点が置かれていた。「歴史の概念について」における比喻を使えば、嵐・強風——すなわち文化の記録の基盤にある過去から未来へと暴力的に吹き荒れる野蛮という強風はまた、時間の流れを、歴史を攪乱して時系列を横断し流れを中断するアナキーな働きもする。ここでいうアナキズムは、テロリズムとか無秩序の闇のようなものを意味するのではなく、時間化を阻む空間思考の行使であり、未来に希望を託すとしても、その未来を実現させるための行動の方向性として革命的切断と攪乱を指示している（ベンヤミンのアナキズム、メシアニズムに気づかせてくれたのがバトラー [2019] である）。そしてこの空間思考についてベンヤミンがあたえている名称がメシアニズムであった。

ディスポジション

空間とは共時構造であり、またベンヤミン的星座に通ずるものがあるとすれば、より一般的名称を探すなら、空間思考はまた〈ディスポジション〉（配置）の思考ともいえる。世界を諸要素の配置として空間的ときには平面的に捉えるときに見えてくるもの、それが世界の共時構造であり、昔の人はこれを生来の傾向あるいは傾向性と考えた（英語の disposition には「配置」のほかに「生来性」「傾向性」という一般的意味がある）。断面と空間的配置によって関係性を見ることによって開ける展望が古来「傾向」の名で呼びなら

わされてきたのであり、それが、配置と関係性から生ずる構造であるところのベンヤミンの星座的配置、あるいはサイド的对位法的配置であった。

ディスポジションを真正面から取り上げる文献は多くはないが——たとえばコンテクストを考察することもディスポジション思考と同じなのだが、コンテクストの語のほうが好まれる——、それでもディスポジションを起点に新たな人文的・文化的・芸術的可能性を開こうとしたある論集のなかで編者は「二〇世紀の偉大な哲学者たちが二元論批判に腐心してきたにも関わらず、いまだに生活者の認識の枠組みが大して変わっていないとするならば、結局のところ件の二元論的人間観・世界観にそれなりの妥当性があることを認めざるをえないだろう」と述べ、「心身二元論が生の実情と異なっているにもかかわらず生活者の認識を規定し続けているというこの事態を的確に捉える」必要があると説く。「ディスポジション」思考を、コンテクストや関係性をみる思考ととらえれば、ここでいう「心身二元論」が、認識し思考する主体（精神・心）を中心とした遠近法的世界観を意味することがなんとなくわかる。ディスポジション的世界観において主体は世界の中心ではなく、世界の一部（主体の脱中心化）であり、主体はそれを取りまくコンテクストとの相互作用によって完成されたり構築されたり妨害されたりする。また二元論の延長線上には弁証法的展開という究極的には予定調和の進化論がある。となれば、「生活者」にディスポジション思考が浸透しないのは、それが政治的・文化的・社会的問題であり、アナキズム的に進歩史観を攪乱するからである。空間思考が、配置の思考が、歴史を、時間を排除する。そしてそれは、『三人姉妹』の最後で去っていく旅団の軍楽隊の行進曲を輝かしい未来への行進曲ととらえ、生きる決意を語る「希望にみちた」主人公のひとりから、さらには世界は確実に良い方向に向かっている、〈いつか私たちが生きてきた意味も、苦しんできた意味もわかる〉と三人姉妹のひとりのようなことをいう合理的楽観主義者マット・リドリー（『繁栄』（原題は『合理的楽観主義者』））にいたるまで、向上する世界とその進歩の信奉者たちにとって、ディスポジション思考は、まさに反資本主義的であり、その空間思考は、格差社会、階級社会の不都合な真実をあぶりだすがゆえに、危険なテロリズムあるいはアナキズムを孕んだ攪乱的要素となっており、進歩史観に急ブレーキをかけることになるからだ。この勝者の行進を中止させるものこそディスポジション思考あるいは、私たちの言葉でいえば空間思考なのである。そしてもし未来における勝者の行進の終わりと敗者たち被征服者の解放を示す象徴的比喻があるとすれば、それはサイドが好んだ「勝利の集会」である（これは、エメ・セザールの詩「帰郷ノート」にあるフレーズだが、その日本語訳は、「勝利の集会」を意識して逐語訳していない）。これまで抑圧されたか抹殺された集団が解放されて、こぞってひとつの場所に集う。空間あるいは平面こそが、行進を攪乱し中断させる、あるいは中断して実現する、メシア的現象なのである。

空間化される歴史

先に述べたように現代は新歴史主義の余波の中にある。そのなかで配置だの空間だの星座だの二次元平面での集会だのと語っても無益な知的思考の試みにすぎないと笑われるかもしれない。だが現代の歴史主義、それも文学研究分野において圧倒的な影響力を誇る新歴史主義的研究は、フーコーの影響もあって、その根幹は空間思考あるいはディスポジション思考である。

たとえば時代精神を設定したり見出そうとしたりする旧来の歴史観は、ヒエラルキー的な社会歴史構造を前提として、一時代の構成要素の横のつながりは重視されなかった。あるいは構造が重視され出来事は無視される傾向にあった。また時代精神の設定なり発見は、目的論的歴史の成立にも寄与し、勝者の行進がはじまる——勝者が、その正当化のために目的を設定し、またその目的から外れるものは徹底して排除された。いっぽう新歴史主義は、中心や主流からはずれた逸話のなかに真実を見出そうとする。また一時代を構成する各要素や各分野は時代精神を頂点あるいは基盤とするヒエラルキーによって組織されているのではなく、ドゥルーズ、ガタリ流のリゾーム形態に似た、ネットワーク上の空間的な広がりの中にあり、相互に影響を及ぼしあう。そのため一分野で活性化された社会的エネルギーは、全分野へと波及・循環することもある。中心と周辺の違いは消滅した、平面的なネットワークがみえはじめる。たとえば18世紀における英国小説と医療行為倫理との関係を探るような研究（この例はまったくの思いつきだが、実際にあってもおかしくない）は例外ではなく典型となった。これは、分野別の境界を超えて、脱境界的な交流を重視する学際的な研究ではあっても、旧来の歴史学からみれば、まさにアナキズム以外の何物でもないだろう。

ただこれだけはいえるのだが、通時から共時へ、そして構造から出来事と歴史への変遷は、あまりに単純すぎる。無時間的共時構造を探求する構造主義の営みは否定されたり克服されたのではなく、その衝撃を受けとめた歴史研究のなかで、構造主義も大きく影響した空間思考あるいは配置の思考（あるいはさらにコンテクスト主義といってもいいが）となって維持され持続されていることはまちがいないのである。

人類史の空間化

フレドリック・ジェイムソンの『政治的無意識』は、1980年代から始まる人文学における政治・社会批評研究を牽引する書であったのだが同時にそれはまた「新歴史主義」とも連動するような、歴史的転回の一書でもあった。それは冒頭のスローガンからもわかる、いわく、「つねに歴史化せよ Always historicize」。

だが、このスローガンから判断すれば、空間思考あるいは配置の思考とはおよそ無縁と思われるこの著書こそ、空間的配置の思考を大胆かつ華麗に動員して歴史化したのだ。歴

史を空間化する壮大な機能転換をしてみせたのだ。

全体の理論編である「解釈について」と題された第一章でジェイムソンが提唱するのは中世の聖書解釈学の伝統を援用した解釈法である。解釈とは書き換えであると主張するジェイムソンは、しかし、特定のマスターナラティブに回収するような書き換え、あるいは原テキストを特定の意味体系の例示なりアレゴリーとする書き換えを退ける。中世の聖書解釈学では旧約聖書の出来事は歴史的事実として尊重されたうえで新約聖書と対照される（たとえば旧約における予言の成就というかたちで）。そしてつぎにそれは個人の精神的变化あるいは道徳的意義に書き換えられ、最終的に人類史の一挿話として書き換えられる。詳細な紹介あるいは議論は避けるが、ジェイムソンが整理するのは歴史的事件あるいはそれを語るテキスト（たとえば旧約で語られる事件）を対象とした字義的読解、つぎにそれを別の意味体系によって読み換えるアレゴリー的読解（旧約の事件を新約の事件と照合するような）、そして次にこれを個人主体の精神的成長あるいは心理的側面に関係づける道徳的読解（イスラエルの民がエジプトで奴隷になったことは、個人が俗事にまぎれて精神的成長を阻まれることと結び付けられるというような）、最後に、秘儀的読解という四段階である。そしてこの最終段階で、原テキストで語られる出来事は人類史の一挿話としてみられ、人類の未来が暗示されることになる。

この四段階読解では原テキストでの出来事は、数度の書き換えによって、原型をとどめぬまでに変容をとげてしまうのではないか。解釈が書き換えならば、「伝言ゲーム」のようにいつしかオリジナルのメッセージは失われるのではないか。解釈が書き換えならば、たとえ見せ消しの「パランプセスト」であっても、いつか原テキストは消えるのではないか——だが、原型と消失における時間的影響力を極力なくせば話はべつである、これは伝言ゲームではないのである。

ジェイムソンは最終的に四段階の解釈を三段階に変える（とはいえ書き換え＝解釈がはじまるのは、上記のかたちで整理された解釈法では第2段階からであって、第1段階を削っただけなのだが）。また聖書ではなくて文学テキストが批評解釈の対象となるため手順も異なる。ジェイムソンが提唱するのは順に「政治的解釈」「社会的解釈」「歴史的解釈」である。ひとつの解釈（「地平」という言葉も使われている）から次の解釈（地平）への移行は、その地平では解決不可能な矛盾なりパラドクスなりを解消するために開始される。

これはオブジェクトレベルとメタレベルに関する論理的操作あるいは超越的審級にかかわる問題であろう。たとえば迷路を走らされる実験ネズミは、自分がなぜ迷路にいるのかわからない。しかし実験者は、ネズミを使った実験の意味も目的もすべて明確に把握している。したがってオブジェクトレベルにおける解決不可能な問題は、メタレベルにおいては解決される。〈やがて時が来れば、どうしてこんなことになったのか、なんのために苦

しんできたのか、それが分かる日がやってくる〉——いまひとつの実験ネズミたる『三人姉妹』の長女にとってメタレヴェルは遠い未来、おそらく本人が死んだ後の未来である。しかしジェイムソンにとってメタレヴェルという高次の超越性のイメージは却下され、空間化される。つまり拡大された地平こそが、メタレヴェルなのだ（そもそもメタレヴェルという用語をジェイムソンは使っていないのだが）。ローカルな矛盾とみえたものが、視野を広げ、地平を拡大することによって、大きなイデオロギー闘争の一部であることがみえてくる。これが第2段階の社会批評あるいは社会的解釈である。それはローカルな問題をグローバルな問題に回収消去することではない。グローバルな視野をもつことによって、矛盾は数多くのローカルにおいて共有される（対位法的発見と、ジェイムソンは使っていないが、サイドなら使うだろう）、しかもローカルな矛盾であることを消し去られることなく。そしてさらにグローバルな視野のもとに、境界横断的認識のもとにあぶりだされるイデオロギー闘争の存在は、さらなる地平の拡大によって人類史の一要素へと導かれる。これが最終段階の歴史的解釈あるいは歴史批評である。そしてそこから先はない。歴史が終わってもいない段階で、また神様でもない私たちに歴史の全体像は把握できない。超出不可能な地平として歴史が存在する。歴史に関して〈やがて時が来れば、どうしてこんなことになったのか、なんのために苦しんできたのか、それが分かる日がやってくる〉としかいえない私たちはメタレヴェルにはいない、オブジェクトレヴェルにしかない、そう、実験ネズミとかわりないのである。

これが歴史化かと驚かれるかもしれないが、ジェイムソンは『政治的無意識』で、歴史を空間によって捉えようとしている。解釈／書き換えを同心円的に地平を拡大することによって、まさにグローバルな視野をもつことによってローカルなものの意味付け、ディスポジション配置を見ることによって、そこに傾向を歴史的可能性をみようとする空間思考を展開する（なお『政治的無意識』の同じ第一章における「サブテキスト論」という、これもまたすぐれた空間思考であり配置の思考の、その重要性を力説したものとしてイーグルトン[2018]がある）。人類史はグローバルな視野においてしか確認できない。あるいはこれを人類史の空間化といってもいい。また地平の拡大は、高みにのぼることによって得られる広範囲の認識である。高みとは超越的異次元的现象ではなく、物理的な高度のことであり、超越ではなく、高みにのぼることで、配置や関係性が見えてくる。このことをフーコーは、ニーチェ（山に登るツァトゥストラ）経由で受け継いできた。つまりフーコーという系譜学とは、グローバルな視野から配置を見出すこと、そこを思考の基点とすることだったのである——またそこから認識基盤とか分類枠といったフーコー的思考が誕生した。

ただし、このことを提唱するために中世の聖書解釈学は、必要だったのか疑問は残る。留意すべきは『政治的無意識』におけるジェイムソンのポレミックの相手は、ノースラップ・フライであったことだ（ちなみに私が大学院生だった頃、小津次郎先生のシェイクス

ピアの授業が終わったあと、今日は、フライ夫妻が来ているから、セミナーと、そのあとの食事会に出るようにと突然言われ、幸い予定がなかった私（予定があってもキャンセルしただろうが）は、いまはなき学士会館分館（現：伊藤ホール）でのセミナーに出席、小津先生が英語の挨拶で、東大の大学院の英語の入試問題に、これまで何度もフライの文章を使ったことを話したり（私には驚きだったが）、食事会でフライと簡単に言葉をかわしたことをいまではなつかしく思い出す）。フライ的方法（神話批評とも原型批評ともいわれた）は洋の東西を問わない文学史の分類整理であった。文学史から時間性を排除して空間的に、おそらく二次元的に展開すること配置すること。まさにこの配置を通して文学を説明するフライの方法は、空間思考でもあり、また配置／ディスポジション思考の実現でもあった。もちろんフライの方法は文学から歴史性のみならず社会性や政治性をも捨象するものであり、ジェイムソンの批判もそこをついてくる。そのためにも中世の聖書解釈学の方法が必要とされたのだ。

なぜならフライもまた——だが、むしろフライのほうが、その発想において配置の思考のジェイムソンの先行者なのだが——、その『批評の解剖』において、中世の聖書の四解釈法を書き直していた。ただその際、字義的読解→アレゴリー的読解→道徳的読解→秘儀的読解の四段階の最終段階に、人類史における意味付けではなく、個人の精神的心理的側面を割り振ったことをジェイムソンは批判する。フライ的読解では、世界は私の大きな心的メタファーである。グローバルな世界は私という個の限りなく広い意識のなかに吸収される。世界は私の心象風景となる。だがフライの最終審級とジェイムソンの最終審級との対立は、リベラル・ヒューマニストであるフライの個人主義的ブルジョワ批評と、マルクス主義批評家ジェイムソンの社会的政治批評との、ありがちな対立であるかのように見えて、その実、別の隠れた次元を浮上させているかにみえる。さきに引用した『ディスポジション』の編者の発言は、おそらく当人が気づく以上に重要な洞察となっているが、そこでは、二元論的発想（旧式の自己中心的世界観、肉体に対する精神の優位を説き、世界を人間の操作対象としての材料としかみない）を脱二元論的発想（配置の思考に代表されるような自己の未完成、生態学的環境による主体形成といった思考）が凌駕できないこと、両者が共存していることが指摘されていた。これは古い習慣が消えにくいということではおさまらない問題である。むしろ新旧の時間的順列とは関係のない同時共存的空間的配置あるいは対位法的配置の問題ではないか。時間は共存を許さない。空間的配置にのなかにこそ、強力な対立物が新旧が主体と客体とが共存する。ジェイムソンの解釈段階は、なるほど歴史的次元が最終審級とはいえ、政治批評も社会批評も歴史批評も、同心円的地平の拡大のなかにあった。つまり、これまでの同心円が消えることはない。空間は多種多様なかたちで共存を実現している。実現とはフランス語でいうと演出（*réalisation*）である。空間はまた舞台でもある。

世界文学

20世紀におけるさまざまな転回 turn に、いまひとつ空間的あるいは空間論的転回を追加しようとするささやかな覚書であるのだが、しかし、この転回は、あまたある転回のひとつではなく、たとえ根源的あるいは本質的ではないとしても、さまざまな転回を実現＝演出する舞台あるいは基盤としてあるというのが、ここにおける賭けである。言語論的転回あるいは構造主義革命はすでに終わったが、その空間思考は受け継がれ、たとえば構造から歴史へと歴史的転回が提唱された私たちの時代においても、歴史的方法は、可能な限り時間性を捨象され空間思考を基盤としてきた。しかもそれは立体的空間というよりも二次元空間あるいは平面的配置をめぐる思考となった。そしてここから先は、もっと俊足のランナーへとバトンを手渡すしかない。その名前は「世界文学」（ここでいう「世界」はグローバルな文学という意味のみならずハイデガー的意味もふくむ）。その作者たち、その批評家たち、その専門家たちである。ただし、ここでは「世界文学」を考察するときには空間思考が有効であることを説きたいだけではない。「世界文学」そのものが、空間思考を体現していることをあらためて確認できることを提唱したいのだ。

だが、ああ、なんと、ブレヒトが、その詩（「あとから生まれるひとびとに」）で嘆いたように、つまり革命運動において、「友愛の地を準備しようとした」者たちが、自分たちでは「友愛をしめせはしなかった」という矛盾——、この矛盾を、私がおかすことになった。空間思考、共時構造、配置の思考の重要性を示そうとしながら、あろうことかリレーの中継ぎランナーという未来への継承を暗示させる時間的比喻を使ってしまったのだ。継承ではなく、いまとここにおける連帯に対位法的並走にこそアフィリエーションにこそ、希望を託すべきであった。勝利の集会に参加するとか、パサージュを見出すと書くべきであった。とはいえ矛盾の存在に気づかせてくれるのも、すべて予定調和で終わる時間的思考ではなく、空間思考の可能性かもしれないのだ。

文献

テリー・イーグルトン『文学という出来事』大橋洋一訳（平凡社2018）第5章

エドワード・W・サイード『故国喪失についての省察2』大橋洋一・近藤弘幸・和田唯・大貫隆史・貞廣真紀訳（みすず書房2009）

フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識』大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳、平凡社ライブラリー（平凡社2010）

ジュディス・バトラー『分かれ道——ユダヤ性とシオニズム批判』大橋洋一・岸まどか訳（青土社2019）第4章

- ヴァルター・ベンヤミン「歴史の概念について」浅井健二郎訳、『ベンヤミン・コレクション1——近代の意味』
浅井健二郎編訳・久保哲司訳、ちくま学芸文庫（筑摩書房 1995）所収
- ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」、『ドイツ悲劇の根源（下）』浅井健二郎訳、ちくま学芸文庫（筑摩書房
1999）所収
- ベルトルト・ブレヒト「あとから生まれるひとびとに」野村修訳、『ブレヒトの詩——ベルトルト・ブレヒトの仕
事 3』野村修責任編集（河出書房新社 1972, 2006）所収
- マット・リドレー『繁栄——明日を切り拓くための人類 10 万年史』太田直子・鍛原多恵子・柴田裕之訳、ハヤカ
ワ・ノンフィクション文庫（早川書房 2013）
- エメ・セゼール『帰郷ノート／植民地主義論』砂野幸稔訳、平凡社ライブラリー（平凡社 2004）
- 柳澤田実編『ディスポジション——配置としての世界』（現代企画室 2008）
- Michael Löwy *Fire Alarm: Reading Walter Benjamin's 'On the Concept of History'*, Translated by Chris Turner (Verso, 2016)